

喜宝院蒐集館にある尚順の還暦祝いの紅型手拭い(ティサージ)に関する一研究

—顕微鏡写真と古文書（護得久朝章からの手紙）の翻刻—

A study of a Jun Sho's *bingata* hand towel (*ti-sa-ji*)

for the celebration of his 60th birthday held in KIHOUIN

— Microscopic photos and reprint of old document (the letter from Chosho Goeku) —

又 吉 光 邦

Mitsukuni MATAYOSHI

要旨

本論文では、沖縄県八重山郡竹富町の喜宝院に収蔵されている尚順男爵の還暦祝いの紅型手拭(ティサージ)について研究成果を報告する。対象とする紅型ティサージは、琉球王国最後の王、尚泰の四男である尚順男爵の還暦祝いの品の手拭いとして由来が明確である。また、尚順男爵、由来を記した護得久朝章の手紙の翻刻、そして護得久朝章と尚順男爵との関係を述べる。紅型の染色に関しては、現在見ることのできる古い紅型と異なる特徴を顕微鏡による写真画像を用いて報告する。

Abstract

In this paper, a study of Jyun Shou's *bingata* hand towel (*ti-sa-ji*) for the celebration of his 60th birthday held in KIHOUIN SYUSYUKAN (Private museum and the temple in the south end of Japan) is reported. Jun Sho is the fourth son of Tai Sho is the last emperor of the Ryukyu Kingdom. The relationship of the Jun Sho and Chosho Goeku is also reported in this paper. Chosho Goeku wrote a letter which explains the origins of the *ti-sa-ji* to Hokuri Uesedo who is the man of Taketomi island (*takidun*). KIHOUIN SYUSYUKAN, is managed by his descendant, stores up the *ti-sa-ji*. Some unique characteristics of the *ti-sa-ji* in terms of dyeing styles is compared with well known old *bingata*.

はじめに

1. 紅型ティサージの由来

- 1.1 竹富島—喜宝院蒐集館
- 1.2 上勢頭保久利
- 1.3 護得久朝章の手紙とその年代
- 1.4 還暦祝いの紅型ティサージ
- 1.5 赤嶋上布（芭蕉布）
- 1.6 昭和初期の沖縄と護得久朝章
- 1.7 護得久朝章の系図と略歴
- 1.8 護得久朝章と尚順男爵

2. 尚順男爵

- 2.1 尚順男爵の功績
- 2.2 尚順男爵と紅型

3. 尚順男爵の紅型ティサージ

- 3.1 全体像
- 3.2 マーク
- 3.3 「染め」について

4. まとめ・課題

考察—「紅型という名称について」

付録 1～4

はじめに

沖縄県には、紅型¹と一般的に称されている伝統的染色技法が存在している。一般的に、筒描きではない型染めの技法で染色された紅型布は、多くの場合、衣装として仕立て上げられる。そのため手拭いとしても使用されていたことについては、あまり取り上げられたことがない。それは、現存する紅型の衣装の方が非常に艶やかで美しく、人目をひくものであるためであろう。特に、那覇市立博物館に収蔵されている琉球王朝時代の王家であった尚家の紅型衣装の美しさは、文字で書き表すことなどできない。

本論文では、沖縄県八重山郡竹富町の喜宝院に収蔵されている紅型手拭（以後、紅型ティサージ）、より正確に述べれば“紅型技法様式で作成されたと思われるティサージ”について明らかになったことを詳細に報告する。

本論文の第1節では、紅型ティサージの由来を示す古文書（護得久朝章の手紙）の翻刻。護得久朝章と尚順男爵との関係について。第2節では、紅型ティサージを制作させた人物である尚順男爵について。第3節では取り上げた紅型ティサージについて顕微鏡写真を交えながら説明し、最後の第4節にまとめを述べる。

1. 紅型ティサージの由来

1.1 竹富島－喜宝院蒐集館

紅型ティサージを収蔵しているのは、沖縄県八重山郡竹富町の竹富島にある喜宝院蒐集館である。喜宝院蒐集館は、上勢頭亨によって始められた竹富島の民間の博物館と資料館が合わさったようなところで、そ

の実、自宅を改良してできた日本最南端のお寺でもある。上勢頭亨は、身体が丈夫でない理由から農業で身を立てることを諦め、20才の1933年（昭和8年）に浄土真宗西本願寺の住職、藤井深遠法師に10年間師事し、仏門に入った。その後、自宅に阿弥陀蔵を安置し「喜宝院」として布教を開始した（文献[4], pp.11-18、文献[5], pp.454-455）。その自宅に博物+資料館としての蒐集館を抱き合わせた²。

現在、喜宝院の住職は上勢頭亨の二女「喜宝院院主釈尼朋香」であり、蒐集館の館長はその婿の上勢頭芳徳である。

この喜宝院蒐集館の中に、護得久朝章氏の手紙の付された尚順男爵還暦祝いの紅型ティサージがある。

1.2 上勢頭保久利

上勢頭亨は、1910年（明治43年）10月25日に福利を父とし、マリツを母として7人兄弟の長男として生を受けた。尚順男爵の紅型ティサージは、上勢頭亨の祖父の上勢頭保久利に届けられている。

上勢頭保久利は、1869年（慶応2年）に仲筋村の勢頭家で生を受けた。青年期までは非常に苦勞したようであるが、大正3年2月の県令により八重山村が石垣、大浜、竹富、与那国の四か村に分村した際、竹富村の行政の開始（同年4月1日）に伴う村議員選挙（大正3年7月14日）によって議員に選出された。上勢頭保久利の議員職は3期に渡り、地域のリーダーとして創世記の竹富村行政の一役を担っている。その後、竹富部落会の顧問として後進の指導に尽力し（文献[4], pp.11-18、文献[6], pp.62-63）、第2次世界大戦後の昭和23年4

¹ 「紅型」は、鎌倉芳太郎による新しい当て字。「形付」が伝統的名称である。上江洲敏夫（文献[1], p.127）、久貝典子（文献[2]）に詳しい。また、付録「紅型」という名称についても参照されたい。

² 著者が喜宝院蒐集館を訪れた際は、入って右手奥の阿弥陀如来にお賽銭をし、手を合わせてから調査するように心がけている。

月にこの世を去った（現住職の上勢頭同子の談）。

1.3 護得久朝章の手紙とその年代

図1.3.2に示す古文書の写真は、護得久朝章が上勢頭保久利宛に認めた手紙である。図1.3.3に活字に翻刻したものを示す。

手紙の概略を述べれば、護得久朝章がティサージを蒐集しており、上勢頭保久利の持つ八重山ティサージ（正確には赤筋入芭蕉布の手拭い）を欲していること。そして、八重山ティサージと交換に尚順男爵の還暦祝いの紅型ティサージと交換しましょうと記されている（尚順男爵と護得久朝章の関係については、後に詳細を記す）。そして、与那国ティサージが手に入れば、更にもう一枚の紅型ティサージと交換しようという内容である。

手紙が出された正確な年月日については不明であるが、次の図1.3.1の紅型ティサージの説明文にあるように1943年3月（昭和18年3月）としてかまわないと思われる。

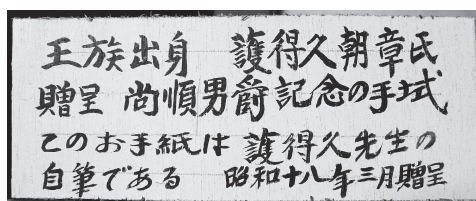


図1.3.1 紅型ティサージの説明文（亨筆）

手紙には、琉球王国最後の王、尚泰の四男である尚順男爵（1873年5月2日- 1945年6月17日）が「今年72才」と記されているため、1945年頃との推定もできるものの、次に上げる事項より、1943年～1944年5月以前、年号で言えば昭和18年～19年5月以前と考えて良い。そのため、喜宝院蒐集館の図1.3.1の説明文は信憑性が高い。

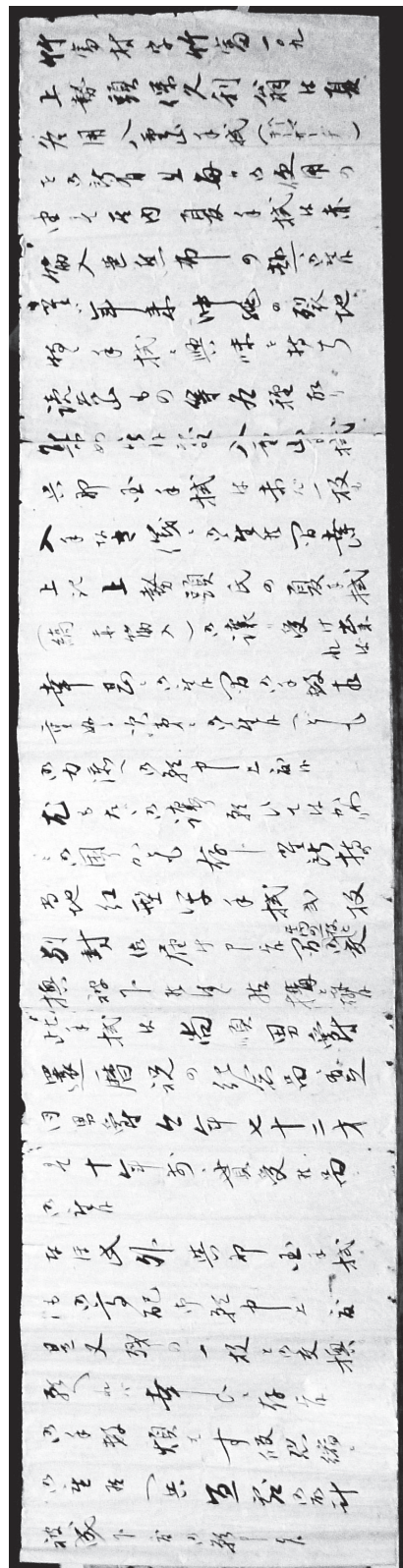


図1.3.2 護得久朝章から上勢頭保久利への手紙

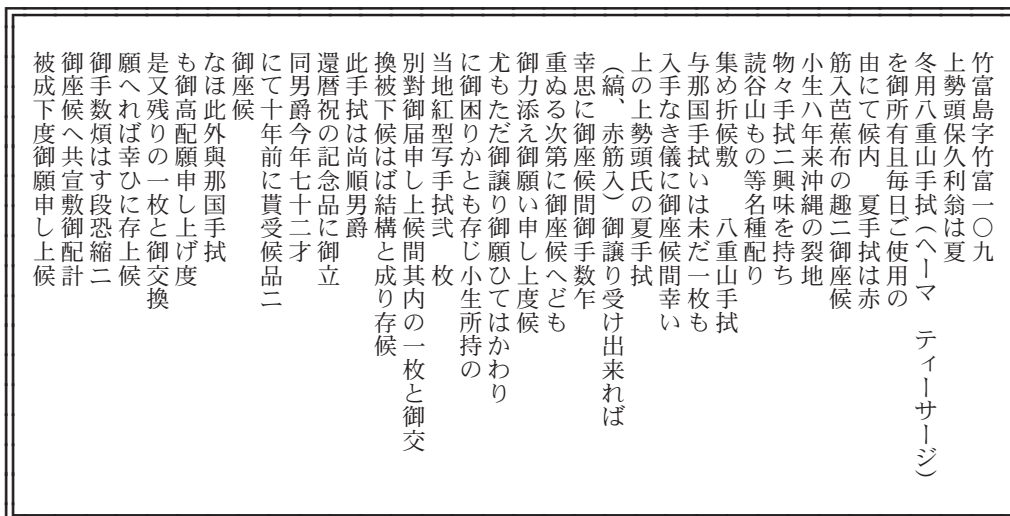


図1.3.3 護得久朝章から上勢頭保久利への手紙（翻刻：又吉光邦）

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ① 1945年は太平洋戦争末期で沖縄戦。 | の手水鉢の上に掛けてある紅型の |
| ② 戦前は数え年で年齢を数える。 | 手巾を見る) |
| ③ 尚順男爵は、1945年の6月に死去。 | 藤田 これは素敵だ、古いものでせうか。 |
| ④ 尚順男爵の還暦は1933年。 | 山里 新しいものですよ。 |

1.4 還暦祝いの紅型ティサージ

3.2節で述べる紅型ティサージにあるマーク（第3節を参照）から尚順男爵が心血を注いで育てた桃原農園が強く示唆されるものの、この護得久朝章の手紙の「尚順男爵の還暦祝いの記念品」以外にそれを裏付ける資料が今のところ無い。

本論文で取り上げる紅型ティサージと思われるものが、1938年（昭和13年）6月1日に発行された『月刊琉球』第六号（文献[17], p.23）の「尚順男爵と藤田嗣治画伯との対談會」にある。

その場面を抜き出して次に示す。

山里 これが荔枝です。

藤田 あゝ千匹屋に出てゐますね。字はどう書きます。

山里 草冠に刀を三つ、それに枝です。
（藤田手帳にしたゝめる。應接間

この会談は、尚順男爵66才の時であるから、可能性として還暦祝いの紅型ティサージとの推測は出来よう。

藤田嗣治画伯は、この紅型ティサージが非常に気に入ったと見えて、その後「首里の尚順男爵」³（文献[10], p.164）で、「…長廊下の端に掛けられた花染手巾は五色の色模様ですぐに目をひいた。」と記している。

1.5 赤嶋上布（芭蕉布）

昭和初期の八重山地方は、洋服の着用品が広がり始めた頃であつたらしい（文献[7], p.264-270）が、1869年生まれの上勢頭保久利は、当時すでに75才頃であるので、洋服が流行する以前の服装ならびに生活習慣を

³ 元の出典は、「首里の尚順男」, 帝国大学新聞, 昭和十三年六月二十日と思われる。文献[14]のページ190を参照されたい。

変えていなかったと考えて良いだろう。手紙にも「夏冬用八重山手拭（ヘーマ ティサージ）を御所有且毎日ご使用の・・・」とあるのを見ると、護得久朝章の欲した上勢頭保久利の所有する八重山ティサージは、あくまでも古い形を残した現役の八重山の手拭であったと考えるほうが自然である。

八重山においても昭和初期には、越後紺（青系）やにこにこ紺（茶色系）、伊予紺やネルの布地の衣服が一般家庭に普及し始めていたことが文献[7](p.265)に示されているので、護得久朝章が欲した「赤筋入芭蕉布」は、それ以前の手織りの八重山の芭蕉布で、貢納布と自家用だけに限られていた「赤嶋芭蕉布」を指すものと考えて良い。従って、蒐集家からすれば、当時既に希少価値の高い手拭いであったと考えられる。しかも所有者は、竹富島の有力者であり、かつ著名人であるのだから、その付加価値は相当なものと推定できる。

次の図1.4.1は、喜宝院蒐集館にある紅露（クール）染芭蕉着であるが、このような生地の手拭であったかもしれない。



図1.4.1 紅露（クール）染芭蕉着

赤嶋上布は摺込み捺染であるが、大正期に織機の高織の一部として捺染染織をするための道具である「綾頭」が取り付けられ、

「八重山式高機」として登場してから、赤嶋上布の生産は勢いづいたようである。そこへ、本土商人達によって持ち込まれた木綿によって、綿やクンボ（交織）で赤嶋布織が盛んになった（文献[4], p.703）。

つまり、八重山では赤嶋の布が大正期以降から大量生産され、麻や木綿、シルケット、クンボ（交織）などの種々の繊維を利用した製品が作られていった（文献[7], p.264）ことになる。

従って、護得久朝章が「芭蕉布」とピンポイントで指摘していることに注意を払えば、すでに竹富島でも「赤嶋芭蕉布」が、数少なくなっていたものと考えて良いのではないだろうか。そう推察すると、上勢頭保久利の使用していた「赤筋芭蕉布」は、護得久朝章にとって、のどから手が出るほど欲しかった昔ながらの「ティサージ」だったと考えてよいだろう。それは、尚順男爵の還暦祝いの紅型ティサージと交換してでも手に入れた「ヘーマ ティサージ」だったのである。

1.6 昭和初期の沖縄と護得久朝章

本節では、護得久朝章がこれほどまでに「ティサージ」にこだわっていたのかを考えてみたい。

柳 宗悦⁴（やなぎ むねよし、1889年3月21日－1961年5月3日）の、民藝運動によって、当時の沖縄県の民芸は全国から好奇心の的のような存在になり、かつ沖縄県民が自ら捨て去ろうとしていた先人達の工芸に

⁴ 民藝運動を起こした思想家、美学者、宗教哲学者。1900年代初頭、文化人が朝鮮文化に興味を示さない中、陶磁器などの朝鮮美術に注目。朝鮮の陶磁器や古美術を収集。生涯にわたり、沖縄の文化を日本本土に紹介し続けた。1938～40年にかけ4度沖縄県に渡り滞在調査。そのとき蒐集された沖縄の工芸品は1936年に設立された日本民藝館に数多く収蔵されており、既に他界して久しいが、今尚、沖縄の民芸・工芸の維持・発展に尽力していると言える。

誇りと自信を与えた時期に近い。昭和初期は、沖縄の工芸を蒐集する人々の来県が後を絶たなかったようである。

1939年（昭和14年）1月2日に尚順男爵邸で『琉球民藝を語る座談会』が、柳宗悦を交えて行われた。

座談会の出席者は、尚順男爵、柳宗悦、山口泉、そして護得久朝章である。席上、最初の話は「染織物」で、紅型、花織、染料などの話から一気に熱を帯びる。尚順男爵の「紺がすり」にまつわる與那城御殿の七度染めの話を継いで護得久朝章は、

「衣裳は御婦人の生命ですからね」と発言している。座談会では、その後もしばらく染織物、特に紅型の染料や図案についての話が續いている。

一方、柳宗悦は、1月8日の琉球新報の金口木舌の中で、次のように述べている。

「芭蕉布の如きは天恵の工藝品としてほこるべきであり紅型の如きは自然に頭が下がる▼（中略）▼尚織物の紺の如きは本縣の紺ほど健全に保存されたものは絶無であり▼それを平素着にしてゐることは他府縣人からすると驚異的である▼殊に色紺を現に民家で織つて居ることは思い設けない喜びの一つであつたと感激し（以下略）」。

以上より、推測の域を出ないが、護得久朝章が沖縄に來た彼らの影響を大いに受けて、上勢頭保久利の「赤筋入芭蕉布」を欲したと推察することはできるのではないだろうか。手紙の文中、「読谷山もの等名種配り集め折候」とあるので、当時すでに個人でかなり蒐集していたものと思われる。

また、護得久朝章の祖父に当たる護得久朝惟は、「書畫骨董に興味深く」（文献[11], p.401）でいたらしいので、その影響も考えられる。護得久朝惟は、「若しも内務省が八重山に癩病らいびょう患者収容所を置くとしたら

本県にとっては大問題で県民としては飽迄反抗せねばならぬ。（以下略）」（琉球新報大正5年9月13日）と反対運動をかなり強く行っていた政治家（代議士；衆議院議員）なので、八重山とのつながりも深い。そのため、護得久朝章と上勢頭保久利⁵は、全く知らぬ仲というわけではなかったと著者は推察している。

しかしながら、護得久朝章の長男、朝剛の嫁である護得久和子の著書『ちからのかぎりに』（文献[8]）では、義父朝章の趣味はカメラであったことが述べられており、琉球のティサージ蒐集に関しての記述が見あたらない。今後、裏付けのためのさらなる研究の余地があろう。

1.7 護得久朝章の系図と略歴

護得久朝章の家系図は、文献[8]（p.196）によると次のようになる。

尚元王（第二尚氏第5代）－尚久（久米具志川王子）－朝盈－朝清－朝宏－朝宜－朝宗－朝利－朝和－朝寛－朝忠－朝睦－朝紀（具志川王子）－朝置（護得久按司）－朝常－朝惟（14世；津嘉山御殿）－朝章－朝剛（妻：和子）－・・・

第14世の護得久朝惟は、尚順男爵の言論、政治に関わる右腕のような存在で、琉球新報創立に加わり、沖縄広運（株）の社長、1914年（大正3年）には、衆議院議員として当選し、敏腕を振るっている（文献[11], p.401、文献[12], p.88）。一言でいえば、寄留商人に対抗する沖縄人の言論、金融、政治的な力を行使する役割を担っていたよう

⁵ 現蒐集館の館長である上勢頭芳徳氏によれば、護得久朝輝（大正3年、竹富村が成立した際、小使として名前がある。大正3年6月に退任）が居り、書や三線に秀でた方で、廃藩置県による没落士族であったそうだが、護得久朝章との関係は、系図より明らかにならなかった。上勢頭保久利氏とは、ずいぶん親しい間柄であったとのことである。後学のため、ここに付記する。

である。

護得久朝章は、文献[12] (p.142) と文献[8] (pp.93-108) によれば、次のようにまとめられる。

【戦前】1890年（明治23年）年10月26日生れ。1910年（明治43年）に沖縄県立第一中学校を卒業後、慶応義塾大学理財科に進学、中退し、1914年（大正3年）に帰郷。1915年（大正4年）株式会社沖縄実業銀行に入行し、1919年（大正8年）に退職、同年実施された第一回首里市議員に当選。1931年（昭和6年）株式会社沖縄興業銀行取締役就任。1933年（昭和8年）－1936年（昭和11年）まで尚侯爵家家扶。1936年（昭和11年）に沖縄興業銀行専務取締役就任。

【戦後】1945年（昭和20年）沖縄諮詢会の財政部長。1946年（昭和21年）沖縄民政府の民政府財政部長。1948年（昭和23年）1月に民政府退職後、琉球銀行の主席理事、10月に理事会長に就任。1952年（昭和27年）第1回立法議員で当選し、議会議長を務める。1954年（昭和29年）7月には琉球大学財団の委嘱理事、その後、志喜屋記念図書館の理事長に就任（大学図書館の蔵書の交渉で渡米か）。1957年（昭和32年）に死去。葬儀は琉球大学本館前広場で琉球銀行、琉球肥料、琉球生命、琉球大学財団の4者合同でとり行われた。政財界ならびに琉球大学の図書館創立に関わる一方で、趣味のカメラが長じて1956年（昭和31年）に沖縄写真店（富士写真フィルム沖縄地区輸入代理店）を開業。沖縄写真店は、長男の嫁、和子によって、沖縄富士フィルム販売（株）、（株）沖縄フジカラーに発展を遂げている。

1.8 護得久朝章と尚順男爵

1.7節で述べたように、護得久朝章は、太

平洋戦争を挟んだ20年間で沖縄に対して大きな貢献をしている。その護得久朝章家と尚順男爵との関係は、次の2つの事例から心的に非常につながりの強いものであったと認めることが出来る。

【事例1】『月刊琉球』（文献[21], p.27）の『琉球民藝を語る座談会』の中で尚順男爵の紅型の染料の研究の発言を受けて、

山口 残念な事ですね、沖縄では最も必要な研究だと思いますが、

護得久 どうも男爵の御研究心の旺盛な事には、吾々若い者は何時も兜を抜いておりますよ。

尚順 （笑ふ）そうでもありませんが（以下略）

【事例2】『ちからのかぎりに』（文献[8], p.68）と『松山御殿物語』（文献[9], p.171）。

戦火の中、首里の松山御殿から南部へ逃げる途中の豪の中で、
『そんなある日、護得久御殿の朝光（朝剛）⁶さんがお見えになりました。何でも南へ過る途中私達がこの壕にいることをお聞きになり、訪ねていらした由です。土の上になんと両手をおつきになり、「松山御殿のアジメーには御機嫌うるわしく……」と御殿でなさったような御挨拶を傍で見えますと、（以下略）』

このようなつながりの事例から、護得久朝章が尚順男爵と非常に親しい間柄であったことを想定することは、難くないであろう。

血縁関係から言えば、尚順男爵は、護得久朝章の嫡子である朝剛の奥方、（旧姓 今帰仁）和子の母の叔父に当たる。

⁶ 護得久和子は、叔父の朝光が当時、東京にいたことから朝剛のこと（朝章の長男）だと思いと記しているので、著者の判断で括弧付けで記した。

2. 尚順男爵

2.1 尚順男爵の功績

尚順男爵は、1873年（明治6年）5月2日（旧暦4月6日）、尚泰王の第四王子として生を受ける。母は松川按司。通称、松山王子、松山御殿（まちやまうどうん）と呼ばれ、雅号は鷺泉（ろせん）である。室は伊是名朝睦の長女の真子。琉球処分に伴い父の尚泰と共に7歳で上京する。1892年（明治25年）、20歳の時に兄の尚寅と共に帰郷した。

1893年（明治26年）に、太田朝敷、護得久朝惟、豊見城盛和、高嶺朝光らと共に琉球新報を設立し、1899年（明治32年）に沖縄銀行を設立した。沖縄を廃藩置県後も言論と金融を尚家の財力を持って操ったとの指摘もなされているが、1915年（大正4年）6月19日に貴族院議員を43才の若さで辞職し、さらに桃原農園の事業拡大のため「趣味の尚順男が 愛好の美術品を近く手放す 得た資金を悉く園藝事業に充當」（琉球新報1926年（大正15年）1月23日。付録1参照）とあるので、むしろ沖縄の将来のために言論と金融、そして貿易のための土地（那覇埠頭の埋め立てられた土地に立つ倉庫街：1970年代）（文献[10]、p.191参照）、さらには沖縄の農産物のあり方について、琉球処分で方向の定まらない沖縄の人々に対して先見の明で用意し、指し示していたと考えた方がよいと思われる。当時における尚順男爵への非難は、寄留商人等による中傷も多数あったと著者は考えている。

尚順男爵がいなければ、薩摩やその他地域の寄留商人によって琉球処分後の沖縄は、完全に植民地化されていたことは間違いないだろう。

尚順男爵が晩年に心血を注いだ桃原農園は、付加価値の高い果物や植物を育ててい

た。また、余り知られてはいないが、桃原農園小鳥部があり、様々な鳥類のペットを有している。太平洋戦争さえなければ、大いに沖縄の地場産業（ペット産業）の先達として活躍していたと当然のように思われる。

昭和13年3月1日発行の『月刊琉球』第二巻第三号（文献[15]）の最後のページには、桃原農園の事業内容の一覧があるが、現在の沖縄産業の縮図、そして、さらなる発展への萌芽があるように思える。尚順男爵の桃原農園での取り組みは、現在の沖縄の産業にとって大いに参考になるものがあると思われる。その意味で再確認が必要であろう。

尚順男爵が沖縄で成功させた有名な植物は、クロトン、メロン、グアバ、ブドウ、キャベツ、パイナップル、コーヒー、そしてマンゴーなどがあり、これら以外にも広く知られていないものが沢山あると思われる。しかし、これらだけでも現在の沖縄が得ている恩恵は、計り知れないものであることは誰も否定できない。昭和13年8月1日発行の『月刊琉球』第二巻第七号（文献[18]）の最後のページには、「寫眞は豊熟せる荔枝と鉢作りのメロン」と題した写真があり、豊かに収穫された果物を前にして鎮座する尚順男爵の気取らない写真がある。

実に第二の野國總管（文献[10]、p.173）、個人的には、それ以上の生きる糧を沖縄県民にもたらした偉人であると考えてよいように思う。著者の考えも含め、尚順男爵に関しては、今後、歴史の中で正しく見直されていくと著者は確信している。

ここで、1926年当時、「桃原農園」の発音は「ももはらのうえん」であったようである。大正15年1月23日の琉球新報には、
ろ せんしやうじゆんだん みづか ももはらのうえん けいえい
「・・・鷺泉尚順男は自ら桃原農園を經營して・・・」（ふりかな、記事のまま）とある。

2.2 尚順男爵と紅型

尚順男爵の趣味は、実益と兼ねていることは広く知られている。また、尚順男爵は美食家であり、絵画、書、陶器、漆器、そして泡盛に造詣が深いことでも知られている。

尚順男爵の紅型に関する眼力は、1939年（昭和14年）3月1日発行の『月刊琉球』の中の鷺泉随筆 七に「・・・。近来紅型が無くなりしは第一注文者が植物性染料と化学染料との区別も分からず、唯型付でさえあれば良いと云うことに墮落した結果であって、第一に需要者の眼識が向上しなければ、昔の様な良い紅型が出ると云うことは先づ望まれ難いことゝ思うのである。」（文献[第二〇号三月号], p. 10）と述べていることから、かなりのものであったと考えて良いだろう。そして、それと同時に昭和14年代の紅型について、悲観的な見方をしていることが分かる。

その一方で、「殆ど植物性染料ですね。ですから色彩に深みがありません。二、三年前から染料の原料植物の研究をして、田舎から取寄せたりして栽培していますが、今時の若い人はどういふものかそんなことに余り興味を持たぬやうです。」（文献[21], pp.26-27）と発言しているので、染料による紅型の復興を自前の桃原農園から始めようと手をつけ始めていたことが分かる。

以上のことから、紅型についての技術的な面では職人にかなわないだろうが、紅型を見る目やかつての「紅型の爛熟期」（文献[21], p.26）の紅型を目指す志は、当時の紺屋⁷（すみや）よりも尚順男爵の方が高かったと言えるのではないだろうか。

⁷ 明治15年10月改正再販の『沖縄對話』の4丁目には、「紺屋」のことを方言で「スミヤ」と記している。可能な限り琉球音で記す方が、沖縄文化の維持につながると考え、本論文では、それに習った。

3. 尚順男爵の紅型ティサージ

3.1 全体像

次の図3.1.1に護得久朝章が竹富島の上勢頭保久利に送った紅型ティサージを示す。図3.1.1の紅型ティサージを見るとすぐに気がつくのが、松竹梅の吉祥文様がメインであることであろう。いかにもお祝いの手拭いの感がある。ただし、文様ではないのだが、一般的な紅型では、松が全体像を持って染められるときに根元に土台のある場合が多い（統計的な確証は得られていないことを付記する）。

一方、文様として気になる点としては、紅型で多用され、かつ長寿を意味する「鶴」や「亀」と一緒に型紙に彫られることの多い「亀」がない点である。平たく言えば、紅型の特徴である動物文様が一つも入っていないことであろう（詳細は、文献[22]参照されたい）。次に注目すべき点は、左中央にある家紋のようなマークである。これについては、次節で詳しく述べる。

次の①～⑪に、図3.1.1に示された紅型ティサージの概要を示す。

- ① 長辺×短辺：約90cm × 約30.4cm
- ② 経糸×緯糸：9本/cm × 19～20本/cm。
- ③ 色数：10色（白を含めて。黒なし）
- ④ 文様：松・竹・梅
- ⑤ 材料：木綿（光沢がある）
- ⑥ 家紋：あり（ロゴ・マークか）
- ⑦ 寄贈者が明らか（護得久朝章）
- ⑧ 由来の「手紙」有り（図1.3.2参照）
- ⑨ 化学染料の可能性あり。
- ⑩ 全体がパステルカラー調である。
- ⑪ 手紡き、手織りと思われる。



図 3.1.1 紅型ティサージ

3.2 マーク

尚順男爵の還暦祝いの紅型ティサージには、家紋のようなマークが入っている。図 3.2.1にその拡大図を示す。

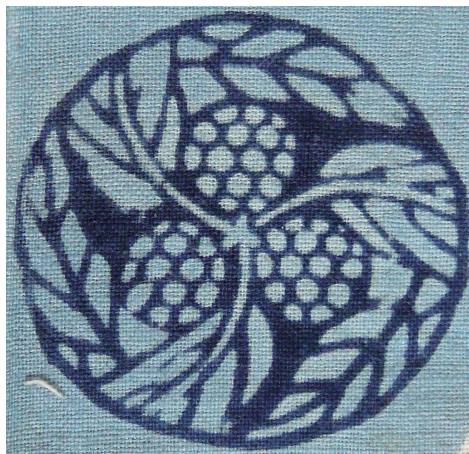


図 3.2.1 マーク (直径：約6.6cm)

このマークは、完全な円形ではないが、直径が約6.6cmのものである。マークをよく見ると、真ん中に3つの果物、その周りに3枚の葉、そして荔枝の荔の字解で得られる「刀」のような3つの葉脈を見て取ることが出来る。三つ巴の紋章にも見えるそのマークの中にある果物の表面には、亀の甲羅状の文様があり、ゴツゴツした肌触り感が表現されている。

桃原農園は、種々の付加価値の高い果物や植物を育てていたが、先述した「写真は豊熟せる荔枝と鉢作りのメロン」と桃原農園の写真のキャプションにあった「荔枝」を象って、尚順男爵が作ったマークであろうと著者は推定している。そして恐らく、尚順男爵御本人が染めた紅型ティサージに御自身で捺印、あるいは型染めをしたものと著者は考えている。

尚順男爵は、「趣味の男爵」(琉球新報大正15年1月23日)と呼ばれるほどの方であり、文献[25] (pp.20-23) には「印章」につ

いて熱く語られた随筆があるので、御自身で桃原農園のロゴ・マークを考えられたのではないだろうか。そしてそれが図3.2.1のマークなのではないかと思わずにいられない。

著者の推定を補う事例として、文献[10]の『松山王子尚順を語る座談会』において上間朝久が「その車の背には㊦という金時絵の紋が付いていました」(p.207)、「多分、松山御殿の頭文字のMを取ったのでしょうね」(p.208)と述べていることを挙げたい。これは、尚順男爵が三十代前まで専用の人力車を持っていたらしく(文献[10], p.207)、その人力車の背に㊦が付いていたのを上間朝久が覚えていたことから出た話である。

以上より、種々のことを考え合わせると、本論文で取り上げている尚順男爵の還暦祝いの紅型ティサージのマークは、桃原農園を意識した尚順男爵による「ロゴ・マーク」であったと推定してよいものと思われる。仮に推定が正しければ、本紅型ティサージは、尚順男爵のデザインした桃原農園のロゴ・マークを有した、現存する貴重な手拭いとなる。

3.3 「染め」について

紅型ティサージは、次に上げる点で特徴があると言えよう。

- 【1】 色彩はパステル系。黒色がない。
- 【2】 紅型特有の「ぼかし」技法があまり使われていない。あっても不完全。
- 【3】 顕微鏡写真から、全て染料であることがわかる(化学染料か。「ぼかし」の出来具合に関係か。要調査)。
- 【4】 顕微鏡写真から、糸の太さにばらつきがあり、手紡ぎ・手織りの可能性あり。
- 【5】 白色(空白)が不均等にあるので、雪景色にも見える。捺印染めかもしれない。手紙には「紅型写」とあるので、

留意する必要がある。

- 【6】 各種文様が重なっている箇所があるため、複数の型紙を用いた可能性がある。

【1】については、図3.1.1を見ていただければ明らかであろうと思う。色は9色(布地の白を含まず)用いられているが、非常に薄い灰色(紫色)の松葉と地に染めてある薄い水色が、全体をパステル調に仕上げている。松の幹・枝の茶も薄めの色調である。明るめの黄土色と赤の松葉もパステル調に合っている。

この紅型ティサージが作られたのは、1930年代中頃と推定できるので、当時の染色や配色からすれば、斬新さを与えたと思われる⁸。再掲になるが、藤田嗣治画伯の「・・・長廊下の端に掛けられた花染手巾は五色の色模様ですぐに目をひいた。」(文献[10], p.164)はそれを物語っているのかもしれない。

【2】については、次の図3.3.1を見ていただきたい。図3.1.1より明らかなように、全体に紅型で特徴的なぼかしの技法が使われていない。しかしながら、赤い松葉の根本にだけ、ぼかしを取り入れた形跡を認めることが出来る。結果として、うまくいったとは言えない出来である。今後、化学的な調査を持って、特定しなければならないものの、その出来栄えに関する考察を与えれば、それが化学染料を使用したためであると述べることができるかもしれない。

⁸ 本論文の著者は、最初この紅型ティサージを目にした際、近年の作のものであろうと推定(錯覚)した。そして解説文を読み、さらに護得久朝章の手紙を読むことで、80年以上前の紅型ティサージであることを認識するに到って驚いたことを今でも覚えている。



図 3.3.1 ぼかし技法と白色部

【3】については、次の図3.1.2～図3.1.10を参照されたい。印刷のため実際の色と異なる場合があると思われる。ご容赦願いたい。

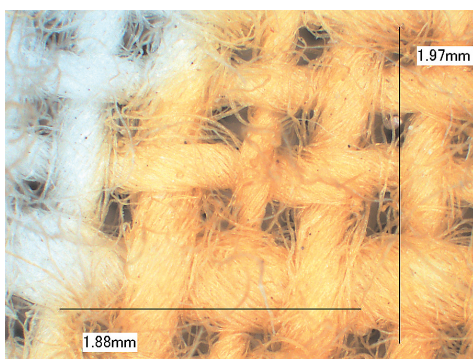


図3.3.2 黄色

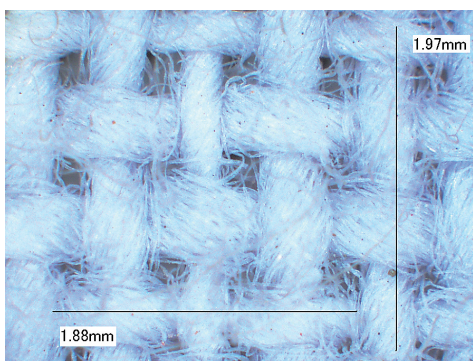


図3.3.3 薄紫（松葉）

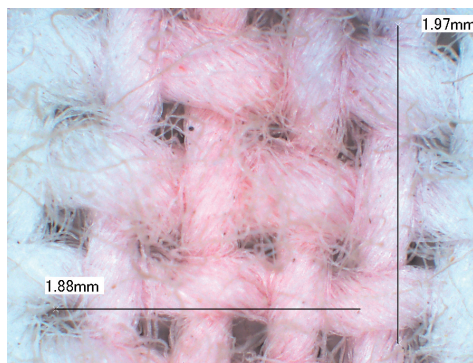


図3.3.4 桃色

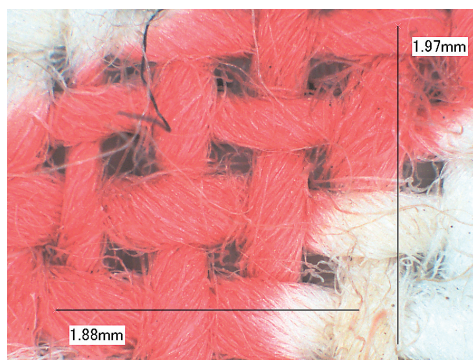


図3.3.5 赤色

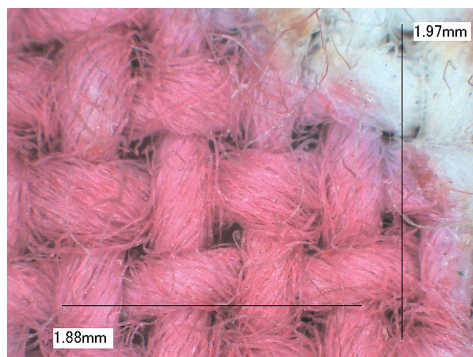


図3.3.6 深赤色

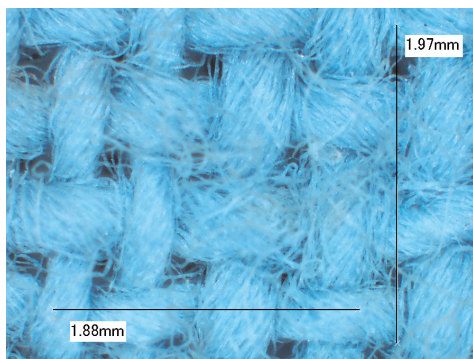


図3.3.7 水色（地の色）

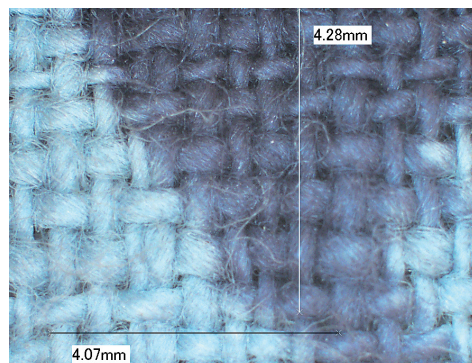


図3.3.10 濃藍色（マークの色）

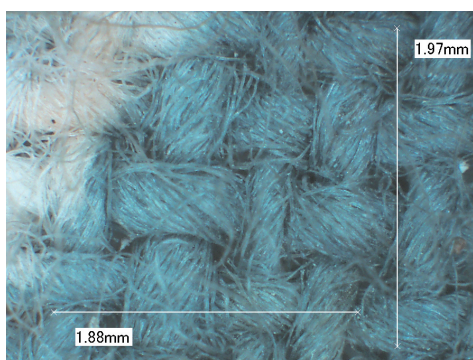


図3.3.8 深緑（松葉）



図3.3.11 うちゆくい（紅型風呂敷。個人蔵）

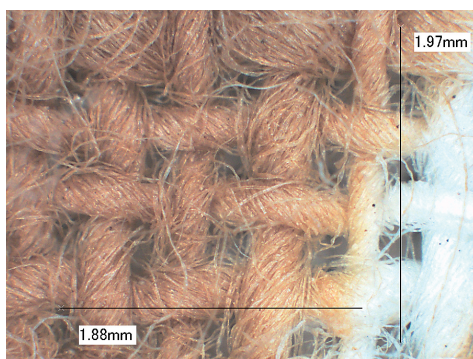


図3.3.9 黄土色（松葉）

図3.3.2～図3.3.10に示した図より、木綿の糸に染み込んだ色であることが分かる。従って、顔料ではない。図3.3.11（苧麻⁹に赤色顔料）に一例を示すが、顔料だと粒子が粗いので表面に張り付く。

尚順男爵は、2.2節で述べたように鉱物染料＝顔料について否定的であったので、天然の植物染料のみで染めた可能性も捨てきれない。あるいは植物染料と同様に繊維に浸透する合成染料を用いて紅型ティサージを作成したと考えられなくもない。図3.3.1のぼかし技法の不完全さと染色の具合から合成染料の使用が疑われるが、今後、化学的成分分析の調査が必要である。

⁹ 麻の一種

【4】については、図3.3.2～図3.3.10に示した図より明らかである。糸の太さにばらつきがあり、かつ糸と糸の間隔も場所により異なる。可能性の一つとして、尚順男爵自ら紡いだと考えることも出来る。この紅型ティサージ（紅型写手拭）の手触りは、非常に柔らかい感じであったが、それは恐らく糸と糸の間隔の開きに原因があると思われる。糸と糸が密だと、ゴワゴワした感触になるからである。

【5】については、図3.1.1より明らかで、枝や松葉と地色の水色との境の白色部分が均一でないことがすぐに分かる。紅型染色家の方々からすれば、白色の均一さが無いため、低い評価を与えるかもしれないが、著者の個人的な見方からすれば、白色が偏って出ているため雪景色を思わせる効果もあると思う。白色の部分を雪化粧として、デザインの一部として見れば、松竹梅、そして雪の模様であり、無意識であれ意図的であれ、個人的には雪化粧を紅型染めで実現した一品と考えたい美しい手ぬぐいである。

この白色の不均一さが示す重要な点は、2枚以上の型紙を用いているか、あるいは型紙の文様を維持するためのつながが見られない特徴もあることから、染色は捺印に拠った可能性も捨てきれない所にある。このことを暗に示しているのが、護得久朝章の手紙にある「紅型写」の文字である。おそらく、いわゆる紅型の染織技法と何か異なっていたため、「紅型写」と記したのであろう。「紅型写手拭」は“紅型を真似て作った”、“紅型に似せて作った”などの意味を含み本来の紅型のティサージと異なることを示しているのかもしれない。今後、現在、紅型の染色に実際に携わっている職人や作家の方々の調査研究と見解が切に望まれる。

【6】については、次の図3.1.1より明らかで

ある。地の水色部と黄土色の松（幹、枝）は、図3.1.1より明らかな重なりを示している箇所がある。同様に松葉と松（幹、枝）との重なりもあるので、松葉と松（幹、枝）は別々の型紙に彫られたものであることが分かる。そして、松葉と水色の地も色の重なりのある部分があるので、これらもまた別々の型紙が使用されたことを示す。従って、最低でも3枚の型紙があったと推定できる。そしてさらに、荔枝を象ったと思われるロゴ・マークが松や、その他の文様と別の型紙に彫られていたと仮定すると、4枚の型紙を使ったことになる。

一般的な紅型は、1枚の型紙をもって完成まで仕上げるとされている。もちろん複数枚用いる臘型などもあるものの、本論文で取り上げたような紅型ティサージの文様配置から考えれば、1枚の型紙で十分である。しかしながら、1枚の型紙で紅型の染めを完成させるためには、糸掛けや文様間の繋ぎをしっかりとしなければならない。それらをしないと、位置がずれ、異なる色の文様同士が重なってしまうのである。糸掛けや文様間の繋ぎの彫りをするにはそれなりの熟練した技術が必要である。従って、複数枚の型紙を用いたこの紅型ティサージの作成には、おそらくそれらの技術を利用できない何らかの事情があったものと考えるのが自然であろう。このように考えると、この紅型ティサージは、紅型職人でない誰かが制作したと考えてよいと思われる。護得久朝章の手紙より、紅型ティサージが尚順男爵の還暦祝いの品であることが分かるので、尚順男爵が御自身の還暦を祝う人々のために自ら制作した紅型ティサージと考えて良いように思われる。護得久朝章が「紅型写手拭」と記したのは、以上のような推察をすれば論理的に理解できるのではないだろうか。

4. まとめ・課題

本論文では、竹富島にある喜宝院蒐集館に収蔵されている紅型ティサージについて、由来の手紙の翻刻、ならびに紅型ティサージに関係する人々の関係、そして紅型ティサージの染めについて調査した結果を報告した。

取り上げた紅型ティサージは、尚順男爵と心的につながりの深い護得久家の当主－護得久朝章から上勢頭保久利に贈呈されたものであるが、今回の調査や染めの方法を通して尚順男爵の作成した可能性があること、桃原農園を想起させるロゴ・マークがあることが明らかとなった。

今後は、さらに調査を深め、可能な限り別の資料をもって、尚順男爵の還暦祝いの紅型ティサージであること、さらに本紅型ティサージならびにロゴ・マークが、尚順男爵の手によるものであることなどを特定できれば幸いであると考えている。

投稿受付日：2010/6/19

投稿採録日：2010/8/17

参考文献

- [1]「染織資料三題」，上江洲敏夫，史料編集室紀要第14号，pp.121-136, 1989.3.
- [2]「「紅型」という名前」，久貝典子，沖縄学研究所紀要『沖縄学』第九号，2006.
- [3]『古琉球型紙の研究』，京都書院，鎌倉芳太郎，1959.
- [4]「竹富町史 第十巻 資料編 近代－竹富島喜宝院蒐集館文書－」，竹富町役場，2005.3.31.
- [5]「竹富町の歴史と民俗」，亀井秀一，1990.5.24.
- [6]「竹富町誌」，竹富町誌編集委員会，1974.3.25.
- [7]「石垣市史 各論編 民俗 上」，1994.
- [8]「ちからのかぎりに」，護得久和子，琉球新報社，1995.8.15.
- [9]「松山御殿物語－明治・大正・昭和の松山御殿の記録－」，「松山御殿物語刊行会」編，尚弘子，ボーダイソックス社，2002.8.31.
- [10]「松山王子尚順遺稿」，山里永吉編集，尚順遺稿刊行会，1969.8.10.
- [11]「沖縄縣人事録」，植原翠邦編，1916.11.20.
- [12]「沖縄縣人事録 昭和12年版」復刻版，ロマン書房本店，1997.7.7.
- [13]「沖縄大百科事典 中巻」，沖縄大百科事典刊行事務局，沖縄タイムス社，1983.5.30.
- [14]「大学図書館の近代化をめざして・その行方（別冊） 尚順拾遺集」，金子豊，2009.5.2.（私家版）.
- [15]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第二巻第三号，月刊琉球社，1938.3.1.
- [16]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第二巻第五号 五月号，月刊琉球社，1938.5.1.
- [17]「月刊琉球」，山里永吉編輯，六月号，月刊琉球社，1938.6.1.
- [18]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第二巻第七号 七. 八月特輯号，月刊琉球社，1938.8.1.
- [19]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第二巻第八号 九月号，月刊琉球社，1938.9.1.
- [20]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第三巻第一号 新年号，月刊琉球社，1939.1.1.
- [21]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第二〇号 三月号，月刊琉球社，1939.3.1.
- [22]「沖縄県立芸術大学収蔵の古琉球紅型型紙（全紙）の文様に関する一研究」，又吉光邦，産業情報論集第6巻第2号，2010.3.
- [23]「沖縄語典 全」，仲本政世，1896.12.7.

- [24]「鎌倉芳太郎資料集（ノート編）第二卷
民俗・宗教，沖縄県立芸術大学付属研
究所編，2006.3.
- [25]「月刊琉球」，山里永吉編輯，第二卷第
九号 十月号，月刊琉球社，1938.10.1.

考察 ―「紅型という名称について」

本論文の著者である又吉は、琉球王朝時代に多色で染めた布や衣装を本当に「bingata」と呼称していたのか、強く疑問に思っている。職人用語であったということでは落ちているようであるが、著者の疑問は、呼称が広く利用されていれば文字に残るはずだと考えているからである。古文書等で確認できる文字は「形付」などであり、bingataと発音できそうなものは「美形」のみで、それでも琉球方音で「美形」がbingataとなるようには思えない。なによりも「美形」なら「美形」を使えば良いだけのことである。また、先達の研究者が「美形」をbingataであると強調し、主張し続けた文献も見ることがない（御存知であれば、御教授願いたい）。おそらく「美形」がbingataと発音しないためであろう。

現在、調査の途中ではあるが、言語学の研究者も含めて、著名な先達の研究者の論文や書籍は、呼称のbingataから全ての議論がスタートしていると思えない。

「紅型」と当て字をした鎌倉芳太郎による紅型型紙の研究書『古琉球型紙の研究』（p.20）には、次のように記されている。

「琉球の紺屋では、型置き染めを「型付」（Katachiki）とよび、各種顔料を用いたものを「ピンガタ」（Bingata）藍染のものを「藍型」「Yegata」と称している。「びんがた」は「ピン型付」「藍型」は「藍型付」のことである。「ピンガタ」は「ピン」「ガタ」で「ベンガル」とは言葉の性格が違う。また「ピンガタ」では「べにがら」は使用しない。「ピン」は狭義に使われるときには「紅」である。そしてコチニールの生臙脂の紅色のことを云う。生臙脂で隈取するときには、「ピンの隈をながす」という。この染法では生臙脂は主調色で、これが仕上げになくは色調は得られない。その狭義の

言葉が変化して灰墨の黒を使って隈取する時に、「黒ピン入れて」と言う。それ故「ピン」を入れるということは隈取するという意味を持ってくる。従って、広義には種々の色で「ピン」を入れるということになる。初めは紅色を使用した型付という意味で呼称が次第に変化して、隈取りを施した型付とか、各種の色彩を施した型付とかという感じに受け取られるようになっている。」

上の文を出現順に箇条書きで整理すると、
[1] 琉球の紺屋では、型置き染めを「型付」（Katachiki）とよび。

[2] 「顔料」を用いたものを「ピンガタ」。

[3] 「ピンガタ」は「ピン」「ガタ」で「ベンガル」とは言葉の性格が違う。

[4] 「ピンガタ」では「べにがら」は使わない。

[5] 「ピン」は狭義に使われるときには「紅」である。そしてコチニールの生臙脂の紅色のことを言う。

[6] 生臙脂で隈取するときには、「ピンの隈をながす」という。

[7] 「ピン」を入れるということは、隈取するという意味を持ってくる。

[8] 灰墨の黒を用いて隈取するときには、「黒ピン入れて」という。

[9] 従って広義には種々の色で「ピン」を入れるということになる。

[10] 初めは紅色を使用した型付という意味での呼称が次第に変化して、隈取を施した型付とか、各種の色彩を施した型付とかという感じに受け取られるようになっている。

となる。

個人的に、今後、上記の「紅型」の論説についてさらなる研究と考察が必要であろうことは否めないと感じている。漠然とではあるものの鎌倉芳太郎の「紅型」に対する長すぎる演繹的な説明に論理的に無理を感じるからである。

まず「紅型」であるための大前提の[2]は、[5]とすでに矛盾している。[3]については日本本土のベンガラ色と沖縄のベンガラ色は異なることが指摘されなければならない。沖縄のベンガラ色は鮮やかであり、紅型に良く用いられていると著者は認識している（著者の認識に誤りがあれば、例示の上、御教授願いたい）。文献資料としては、明治29年12月7日発行の『沖縄語典 全』（p.171）に、

ベンガラ、ベニガラ 榜葛刺、紅殻
びんがらー

書料染料トス色赤シ榜葛刺ハ印度ノ地名ナリ

とあるので、染色の顔料として使われていたであろうことの推定に全く無理はない。

以上より、鎌倉芳太郎の論説の前提が崩れるのだが、まだ論説全体の無理を論破できるだけの資料を著者は持ち合わせていない。

著者の力不足を覚えなければいけないものの、琉球の貴重な文化遺産であるいわゆる染色物の艶やかな衣装に当てられた「紅型」の文字は、鎌倉芳太郎が初めて使った当て字であって、歴史的文化的に見直す必要があるのではないかということは、次に挙げる資料からも言える（付録の各資料は「紅型」「藍型」と区別していたのかについても、疑問を持たざるを得ないことも示している。注意深く読んで頂きたい）。

付録2は、大正7年4月29日の新聞記事だが、沖縄県外の柄物の着物で中型のことを（カタチキ）と呼んでいる。これは、当時の沖縄の地において「かたちき＝形付」が柄物の着物に対する一般的な呼称であった証拠である。

付録3は、大正14年11月16日の新聞広告であるが、その中には「麻布形付類」と明記されている。この広告を出した崎山商店（おそらく同じ商店）は、10年以上後の『月

刊琉球』（昭和13年5月1日発行）にも広告（付録4）を出している。そしてそれにも「麻布形付」と明記している。呉服・布を扱う専門の商店が「形付」を使用し続けていることは、決して無視してはならない。

資料および古文書で使用されている「形付」を用いれば、衣装に関してあえて藍型、紅型と区別する必要もない。型染めでない沖縄の美しい筒描きの風呂敷（ウチュクイ）を無理して紅型調の風呂敷と呼ぶなくて良い。藍染めのみであろうが多色であろうが、筒描きの風呂敷は「ウチュクイ」としか呼ばない。

また、著者は「Yegata」の呼称の存在そのものにも疑問符を付けざるを得ないと考えている。藍で染めた紺染め衣装のことを今でも「クンジィ」や「クンズン」と呼称するが、「エージィ」、「エイズン」とは言わないのである。さらにつけ加えて言えば、藍染めの紺は紺紺である。なぜ紺形「Kungata」ではなく鎌倉芳太郎のいう藍型「Yegata」なのだろうか。

最後になるが、「型」も当て字であって、歴史的に記せば「形」である。著者の調査不足かもしれないが、「型」の文字は古文書で殆ど見たことがない。かなり少ないことに間違いはない。紺屋（すみや）で使用されていないか、公の文書で使用頻度の極端に少ない「型」という漢字を現在も用い続けるのは不適切なのではないだろうか。

鎌倉芳太郎のノートには、琉球の士族の女性がしていた入れ墨、すなわちハジチ（針突）も「士型」（文献[24]、p.202）と分類していることを付記し、強く注意を促しておきたい。

琉球から沖縄に強制的に移された時、多くの伝統的な呼称が、学術の名のもとに掻き消され、あるいは飲み込まれた可能性がある。

趣味の尙順男

愛好の美術品を

近く手離す

得た資金を悉く
園藝事業に充當

學縣經濟破綻の窮狀に直面して漸く糖業偏重主義の誤謬に目覺めて來た縣民は發達事業や移出向來栽培の如き副業獎勵の聲が喧傳されて來た折柄、多年書齋骨董いじりの趣味生活に専念の縣尙順男は自ら桃源農園を經營して土いじりの農民生活に轉じて専ら移出向き園藝作物の試験栽培に勵情して注目されてゐるが、今回男は産業振興による本縣救済事業の一端として國

園藝事業の有望なるに着眼し旁々昨今の時勢に鑑み多年の間苦心して蒐集せる書齋骨董並に古器籍道具類數千点の珍品寶物をば一部参考品を除く外は悉く之を賣却し其の資金を以つて今後専ら園藝事業に充て奉縣下から中央市場に移出する特産農作物の増殖を圖り男の晩年を該事業の發達獎勵に奉仕する決心を固めたそのことである

●夏の御仕度

▽木綿物は
▽五割高い

◆絹物の上物が可成賣れるそうである、一番よく解るのは例年は帽子の景氣でもいい時の舊の三月頃には帽子女子等が中型(カタチキ)の揃ひをよく買つたものだ、今年には極めて少なかつたの事であり、夏物として一番よく賣るのは越後縮で淺地が五圓から六、七圓位紺地が六圓から十六、七圓位である、浴衣地は九十錢位から三圓位迄あつて一番よく

(以下略)

(中略)

廣 告

◎本場大島紬 ◎琉球國産紺紺、各
 ◎全久米島紬 ◎麻布形付類
 ◎宮古上布 ◎座蒲團地類
 ◎八重山上布 ◎八重山半麻織

右安價ニテ販賣仕歸間何卒ご用命願上

ナハ西本町三ノ一五

利 崎 山 商 店

琉球特産織物の御用は當店まで……

本場大島紬
宮古上布
琉球紺紺
麻布形付

崎 山 商 店

電話 四三八番
那覇市西本町三丁目